

沖ノ島祭祀の変遷

日本の新石器時代である 1 万年以上前の縄文時代の霊的慣行から日本固有の宗教・神道は徐々に発展しました。なすがままの自然の力に対して、人々は深い敬意を持ち始めるようになりました。五穀豊穡や安全な旅を祈願して祭礼が行われ、自然の土地や物は神として祀られました。

奉獻品

鏡・剣・勾玉(コンマの形状をした数珠玉)など人間が作ったものにも霊力があるとされました。これらの三つの品は、日本の皇室の正統性を象徴する「三種の神器」です。

祭場の変遷

鏡や貴重な勾玉から貨幣や陶器に至るまで何万点もの品々が、現在知られている神道より前に遡る野外儀式において沖ノ島で使用されていました。最初に知られる沖ノ島での儀式は、太陽と月に開かれた岩の上で行われました。5 世紀頃、これらの儀式は沖ノ島の中心付近で行われました。これらの場所では鏡や鉄塊が発見されています。その後 2 世紀の間、儀式は深い張り出しの下にある大きな岩の陰の場所に移りました。7 世紀頃までには、岩の部分的な陰に奉獻品が置かれるようになり、8-9 世紀には現在の沖津宮の社殿近くにある開けた場所での野外の祭事へと変遷しました。